

発刊に当たって

後志教育研修センター 所長 平 正 博

今、教職を生業としている皆様が、子どもの頃に受けられた授業はというと、どちらかといえば、教師中心の「知識詰め込み型（ジグソーハズル型）」が多かったのではないかと推察します。

しかし、社会は大きく変化し、グローバル化の時代に入り、知識をたくさん覚えているだけではなかなか通用しない、そういう成熟時代となってきたのもまた真実です。これからの社会を生きる子どもたちは、知識を活用して問題を発見し、正解の見えない問いに対しても自分なりの解決策を見出すことが一層重視されるようになります。すなわち、「PISA型学力（レゴブロック型学力）」への転換を図り、知識技能そのものだけではなく、それらを運用する能力をも包摂する学力観へと移行することが授業の根幹となります。授業という教育活動の歴史を振り返った時、子ども時代に受けた授業と、教員となって子どもたちを前にした授業とでは、その考えを大きく変えていかなければならない時代に入っている訳です。それはまさに、幕末を待として、明治を思想家として生き、「一身にして二生を経（ふ）るが如く」と言った福澤諭吉先生の生き方と軌を一にするようにも思います。今こそ、教員一人一人の身の中に、「二生を経（ふ）るが如く」のようなマクロ的な視点を持って生きることが真理であります。そして、当時の諭吉先生が一番大切にされたものが「学問」であることを鑑みましても、教員に今最も必要なものは「研修」において他にはありません。しかも、「個人の研修」から学校改革・学校変革を基軸とする「組織的な研修」へと、そのシフトも転換しつつあります。このような時に、本研究が多くの学校の指導実践に活かされますことをご期待申し上げますとともに、今後の研究のためにも、ご忌憚のないご批評、ご助言をいただければ幸いです。

結びになりますが、研究の推進に当たっては、利他の心をもって研究に取り組みました所員の方々、ご指導いただきました後志教育局指導主事の先生方に心からお礼申し上げます。また、発刊に際しましては、ご支援・ご協力いただきました後志教育局をはじめ、関係機関に厚く感謝申し上げます、発刊のあいさつといたします。